

聖霊降臨後第7主日(特定13)

2011/7/31

聖マタイ福音書第14章13節～21節

於:聖パウロ教会 司祭 山口千寿

わたしが管理牧師をしている東京聖マリア教会の一人の信徒の方が、しばらく前から、自分は聖職の道を歩むように召し出されているのではないかと、召命を感じるようになりました。その方と一緒に聖書のみ言葉を黙想し、信仰生活を振り返りながら、祈りつつ準備を重ねる時期を過ごして来ました。

昨年、その意思を教会委員会に伝え、志願の理由や召命感について話をし、教会が喜んで送り出すことができるように、何度も繰り返して話し合う機会をもちました。その中で、ある方が尋ねました。「あなたは聖職になったら何をしたいですか」、と質問をしました。そのような質問が出ることを想定していなかったのでしょうか。志願者は咄嗟には答えが出てこなくて、ウーンとしばらく考え込んでしまいました。質問した人は、おそらく、ご自分も聖職の道を歩むことを考えたことがあるのでしょうか。わたしだったら、聖職になったら聖餐式をしたい、そこが信徒とは決定的に違うところだと思いと述べました。

その会話を聞いていて、わたしも自分が同じ質問を受けたら、なんと答えていただろうかと思ひ巡りました。皆さんが、もし、聖職への召命を受けたとしたら、何をなさりたいでしょうか。そんなことは考えてみたこともない、という方が多いかもしれません。

しかし、最近はこの世での仕事の定年が来るのを待つかのようにして、志を立てる方が少なくありませんから、皆さんにも新たな召命に歩む機会が訪れないとは言い切れません。イエスさまの弟子たちも、自分が声を掛けられるとは思ってもよらなかったのではないのでしょうか。突然の出来事に、思わず、ハイと返事をしてしまってイエスさまに従うようになったのではないのでしょうか。呼ばれたら何をしたいかなどと考える暇もなく、気がついたらイエスさまと行動を共にしていたというのが、正直な気持ちかも知れません。

今は、聖職になるまでに長い準備の期間がありますから、その間に、自分なりの聖職像を描くことができるでしょうし、それに向かって密かに夢を膨らませることは楽しくもあり、また、覚悟も決まるでしょう。

熱心に伝道したい、イエスさまのこと、神さまの愛を多くの人に伝えたい、それが聖職としてなすべき務めである。信徒であっても同じ働きをすることは当然のことだけれども、聖職は率先して伝道に取り組むべきであると自覚している方は少なくないはずだ。いや、聖職であれば、表現の仕方は違ったとしても、誰もがそのように思っているはずだ。

ある人は、牧会カウンセリングを専門として、訪れる人の相談事に耳を傾けることを仕事の中心に据えたいと願っているでしょう。別の人には説教に重点を置いて、聞く人の心に届く言葉を紡ぎ出すことに腐心していることでしょう。更にほかの人は礼拝を美しく捧げるために、すべての関心を注ぎ込んでいるでしょう。或いは、霊的生活に集中して神さまとの交わりを深めることが最大の課題であると自覚し、実践している人もあるでしょう。

「あなたは聖職になったら何がしたいのですか」という問いは、教会の働きには様々な側面があるが、その中のどの働きに関心を持つのか。そしてそれを行なうことを通して聖職としてどのようなあり方をしようとしているのか。聖職としての生き方、奉仕の仕方の軸を何処に置くのか。そこが問われたのだと思います。

さて、今日の福音書は、イエスさまが5つのパンと2匹の魚で、男だけで5千人もの人々を養った物語です。場面は人里離れた寂しいところです。イエスさまはそこで独りになってしばらく時を過ごしたかったのです。その理由は、洗礼者ヨハネが領主ヘロデによって首を切られたという報告がもたらされたからでした。洗礼者ヨハネはイエスさまの従兄弟に当たります。その従兄弟が神さまの召し出しを受けて、救い主が登場するための先駆けとして道を整える働きを行なって来ました。人々に悔い改めを説き、洗礼を授けて、救い主の到来に備えて生活態度を根本的に改めるよう、人々に要求しました。

その流れの中で、ヨハネは領主ヘロデの結婚問題を非難しました。ヘロデが自分の兄弟の妻であったヘロデヤを無理矢理に奪って一緒になろうとしたのですが、そんなことは律法で許されることではないと、権力を恐れず、断固として神さまの正義を語りました。そのため、ヨハネは捕らえられて幽閉されていました。

ところが、ヘロデの誕生日にヘロデヤの連れ子であったサロメが客の前で踊りを踊り、それを喜んだヘロデが、望むものを何でもやろうと約束をします。サロメは母親のヘロデヤと相談し唆されて、それでは洗礼者ヨハネの首を盆にのせてこの場で下さいと願いました。この要求には、さすがにヘロデも参ってしまったのですが、皆の手前、反古にするわけにも行かず、ヘロデの首を刎ねるよう命じるのです。

ヨハネの殉教の知らせは、イエスさまを深い悲しみの中に突き落としたに違いありません。同時に、ご自身の上にも厳しい迫害の手が及んでくることを予感させたことでしょう。そのような厳しい現実には直面して、イエスさまはご自分の使命を再度確認し、歩みを進めるため、独り静かに父なる神さまへ祈る時を必要とされました。

しかし、静かな祈りの時を過ごすことは許されませんでした。大勢の群衆が追いかけて来たのです。イエスさまのみ言葉とみ業が、人々の魂の奥深くに触れることで癒しが起こることを求めて、後を追って来たのです。その姿に、イエスさまは腸(はらわた)がちぎれるほど深く同情されて、独り祈るために寂しいところに向かう目的を中断して、群衆の求めに応じて時を過ごすのです。

そうしている間に日が傾き、夕食の時間も過ぎようという時刻になりました。弟子たちは群衆が飢え渴いていることに気づきます。肉体的な面に於いても魂の深みに於いても、必要不可欠とされるものが、未だ整えられていないのです。ヘロデによって神さまのみ言葉が抹殺されようとしている現実があるのです。多くの人々の魂が必要としているものは、どこから与えられるのでしょうか。

弟子たちには群衆の必要としているものを与えることはできないのです。それ故に、少なくとも肉体の飢えを満たすためには、自分たちで村へパンを買いに行かせましょうと、提案することしかできないのです。それが現実的な対応だと、弟子たちには思えるのです。飢えている人々に食べ物を与えることは大事な務めです。軽く見て適当にあしらって済ませて良いことではありません。しかし、物質的な面でも、無力な弟子たちの姿が顕わになります。

その弟子たちに、イエスさまは思いがけない言葉を掛けます。「あなたがたが彼らに食べる物を与えなさい。」手元にあるのは、たった5つのパンです。わずか2匹の魚です。男だけで5千人もの大群衆の前では、これらの食べ物はないにも等しい分量です。弟子たちは途方に暮れるほかなかったでしょう。自分たちの無力さを、力のなさを、改めてはっきりと見せ付けられることになりました。

しかし、その無力な、限りのある弟子たちをイエスさまはお使いになるのです。弟子たちの持っていたささやかなものを用いて大きな働きをなさるのです。「それをここに、私のところに持って来なさい」(岩波訳)と命じます。繰り返しますが、弟子たちだけでは何もできません。多くの人々の飢えを満たすことなど、到底、できないのです。体と心と魂に必要とされているものを与え、更に、12の籠に溢れるほどの豊かな賜物を与えてくださることがおできなのは、イエスさまだけなのです。弟子たちの現実的な判断が、必要なものを満たすではありません。わずかな取るに足りないと思えないものをイエスさまのところに持って行く時に、イエスさまがそれを祝福してくださる。そして尽きることのない命の賜物へと変えてくださる。弟子たちは、その賜物を人々の中に踏み込んで行って配るのです。それが弟子の働きです。イエスさまと一つに結ばれた時に、そこに弟子たちの働きが始まるのです。

「聖職になったら何がしたいですか。」この質問には落とし穴があります。確かに長い期間、そのための準備をして、夢を描いて、あれもしたい、これもしてみたいと、希望を膨らませます。しかし、この質問に誰もが成る程と思うような回答をすることが、本当になすべきことなのではありません。そうではなくて、そこで最も気がつかなければならないことは、自分の力では何もできないのだ、ということを知る事です。自覚することです。自分の限界を知らされることです。

だからと言って開き直って、今、自分にできる現実的な解決方法に寄り頼んで、これが自分にできる精一杯のことです。ベストを尽くしましたと言って、弁解したり、或いは、自ら満足して終わらせて良いのではありません。そうではなくて、イエスさまが深い憐れみの中から働いてくださることへの徹底した信頼に生きるのです。わずかな小さなものでしか

ない自分を、イエスさまの足下に置く時に、イエスさまが祝福して用いてくださる。そのことへの確信です。

「聖職になったら何がしたいの」、と問いを発することは、「信徒である自分は何をしたいのか」、と逆に自らに問い返されることでもあるのではないのでしょうか。この質問にどのように答えたらよいか、今日は思いを巡らしてみたいと思います。